

山と博物館

第50巻 第5号 2005年5月25日

市立大町山岳博物館

市立大町山岳博物館 企画展 特集号

播隆・槍への道程 —善の綱をたどれば—

会期：平成17年6月4日(土)～8月21日(日)

開催にあたって

市立大町山岳博物館

このたび、当館の平成十七年度企画展として、播隆上人と槍ヶ岳開山をテーマにした企画展を開催する運びとなりました。

槍の穂先のように鋭く尖った山頂部をもつ槍ヶ岳(三二八〇m)は遠くからでもすぐにそれとわかり、北アルプスを象徴する山の代

表格です。
槍ヶ岳は江戸後期の文政十一(一八二八)年、念仏行者・播隆によって開山されました。播隆は合計五回にわたる槍ヶ岳登山で、山頂に仏像を安置するだけでなく、山頂付近の岩壁に藁縄と木製の鈎で作った「善の綱」(後により丈夫な鉄鎖にかけかえられる)を取りつけ、後につづく登拝者の安全を図りました。これは、「日本アルプス」の名を世界に紹介した英国人宣教師ウォルター・ウェストンによる槍ヶ岳登山に先立つこと六六年前のことです。明治時代

にはじまった日本の近代登山以前、播隆に導かれた多くの日本人が槍ヶ岳山頂に登拝していたのでした。

当時、なぜ播隆とその弟子や講中の人びとは高く険しい槍ヶ岳の頂上まで歩を進めたのでしょうか。

本展は「第一部 念仏行者・播隆―人と足跡―」「第二部 播隆の槍ヶ岳開山」「第三部 播隆研究アラカルト」の三部からなり、槍ヶ岳への善の綱設置にいたるまでの過程を、山登りの道程でいう何合目にあたるかにたどって展示を構成しています。

ここではネットワーク播隆代表・黒野こうき氏の監修・協力を得て、岐阜・富山・長野県などに現存する播隆関係資料を展示し、槍ヶ岳開山に込められた人びとの思いを探るとともに、日本の近代登山以前、国内における登山の一面を紹介します。

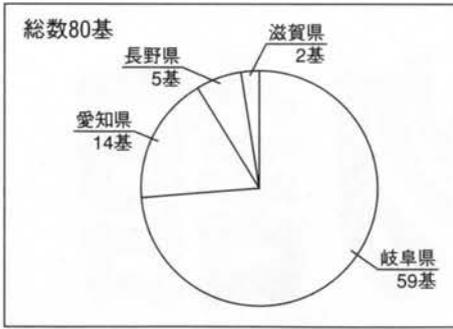
本展の開催にあたり、貴重な資料をご出品いただきました所蔵者の皆様ならびにご協力いただきました関係各位に対し、厚く御礼申しあげます。



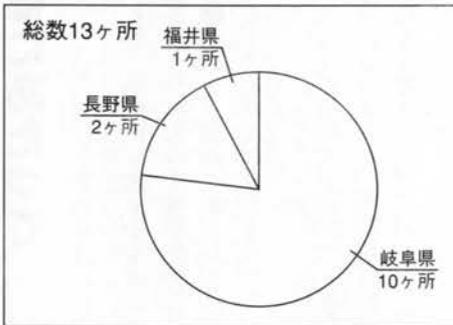
播隆上人修行場跡「播隆窟(坊主の岩屋)」

撮影・提供 黒野こうき氏

槍沢上部の標高およそ2,700mにある岩窟。文政9年(1826)8月、播隆は1回目の槍ヶ岳登山でこの岩窟に同行者とともに泊まった。その後、この岩窟は播隆の修行場となり、天保5年(1834)の4回目の槍ヶ岳登山では53日間山籠りして修行を行なっている。



播隆上人六字名号碑の県別分布数
 ネットワーク播隆編・発行『播隆研究 第1号』(2000)の「播隆名号碑分布表」より作成
 「南無阿弥陀仏」の文字を自然石などに刻んだ石碑を六字名号碑(ろくじみょうごうひ)という。播隆筆による名号碑は80基の存在が確認されており、それらは播隆の足跡や影響を知る上で重要な手がかりとなっている。



播隆上人修行場跡の県別分布数

ネットワーク播隆編・発行『播隆研究 第5号』(2004)の「本書でとりあげた播隆上人修行場跡」(平成16年4月 黒野こうき作成)より作成
 播隆が修行したと伝えられている山中の岩屋や窟などが岐阜県を中心に10ヶ所余り存在している。なお、これらのうちには文献史料で明らかな裏付けがあるもの、あるいは地元の伝承でのみ残るものも含まれている。

企画展 「播隆・槍ヶ岳への道程」

「善の綱をたどれば」
 市立大町山岳博物館

第一部

念仏行者・播隆 — 人と足跡 —

播隆(一七八六—一八四〇)は、江戸時代後期に各地で修行・布教につとめた念仏行者でした。その生涯において、笠ヶ岳再興、槍ヶ岳開山、穂高岳登頂を果たし、登山史上にも足跡を残すことになりました。

しかし、その本来の姿は、常に民衆とともに生き、その幸せを願った民間宗教者(聖)でした。

ここでは、近世(江戸時代)の聖のひとりであった播隆の全体像についてご紹介します。

一合目 出生から巡錫

播隆は天明六年(一七八六)に、越中国新川郡河内村(現富山県富山市河内)の中村佐右衛門の次男として生まれました。

十代でふるさとを出た後は各地を巡り、生涯一度も故郷に戻ることはありませんでした。

第二部

播隆の槍ヶ岳開山

播隆は槍ヶ岳での登拝修行を合計五回行なっています。播隆自身は、開山ということばを使わずに「開闢(天地の開けはじめ)

という意味」といっており、その目的が達成されたのは天保五年(一八三四)の四回目の登山でした。

その際、山頂を平らに広げ、先に安置した三体の仏像に、新たに仏像一体を加えて四尊とし、これをもって槍ヶ岳寿命神としました。さらに、槍の穂先に藁縄で作った「善の綱(善所へ導く綱という意味)」をかけた。ここでは、播隆が槍ヶ岳開山を果たすまでの過程をご紹介します。

二合目 播隆とその時代

播隆が生きた時代、一揆や世間の騒乱を抱えながらも、徳川幕府による平和が続いていました。しかし、一方で幕藩体制は大きく揺らぎはじめていました。

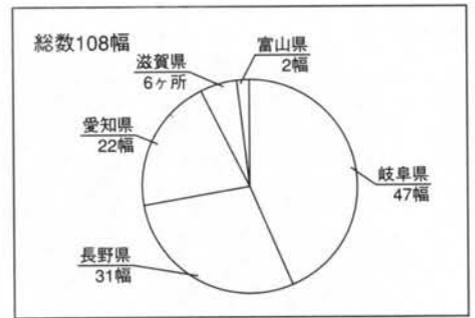
江戸が経済・文化面で大変貌をとげた文化・文政期(一八〇四—一三〇)、富士山・立山・白山は三大霊場として庶民の間に広く知られ、各地には信徒による講(信仰の会)が数多く組織されました。

この時期に盛んとなったこうした霊山登拝は、物見遊山・遊興という一面もありました。

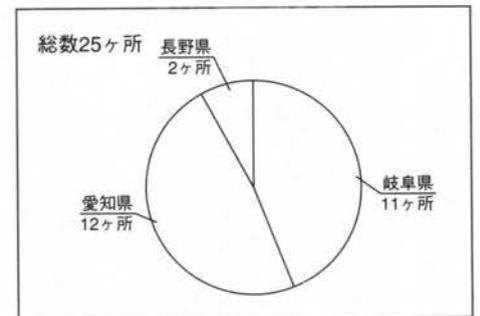
三合目

伊吹山修行

山野、深山幽谷に修行の場を求めた播隆は、



播隆上人六字名号軸の県別分布数
ネットワーク播隆編・発行『播隆研究 第3号』(2002)の「播隆名号軸分布表」より作成



播隆上人念仏講・念仏行事の県別分布数
ネットワーク播隆編・発行『播隆研究 第2号』(2001)の「本書で取りあげた播隆念仏講・念仏行事一覧表」(平成13年4月 黒野こうき作成)より作成

文政七(一八二四)、八、九年ころにかけて伊吹山での山籠修行を行いました。

四合目

笠ヶ岳再興

飛騨国吉城郡本郷村(現岐阜県高山市上宝町本郷)にやってきた播隆は、文政六年(一八三三)にはじめて笠ヶ岳へ登ると、山頂への登山道を整備し、この山を再興しました。翌年には山頂に阿弥陀如来像を安置しました。

五合目

飛州新道 ― 槍への通い道 ―

飛州(信濃国)と飛州(飛騨国)を結ぶ古道を改善し、交易の道として開削が進められた飛州新道。

文政九年(一八二六)以来、播隆は五回にわたる槍ヶ岳登山において、槍への通い道として、この新道の一部を登りました。

六合目

槍登頂 ― 初回登山 ―

槍ヶ岳をめざした播隆は、飛州新道で働く信濃国安曇郡小倉村(現長野県南安曇郡三郷村小倉)の中田又重と出会いました。

七合目

槍開山 ― 二回目の登山 ―

文政十一年(一八二八)、再び槍ヶ岳へ登った播隆は、頂上に阿弥陀如来など三体の仏像を安置し、槍ヶ岳開山を果たしました。このとき、穂高岳にも登り、六字名号碑を安置しました。

八合目

槍整備 ― 四回目の登山 ―

天保五年(一八三四)、播隆は四回目となる槍ヶ岳登山で山頂を平らに広げ、先に安置した三体の仏像に、新たに持参した銅製の釈迦如来像を頂上に安置しました。そして、それら四尊をもって槍ヶ岳寿命神としました。さらに、槍の穂先に藁縄で作った「善の綱」(善所に導く綱という意味)をかけました。

九合目

最後の槍へ ― 五回目の登山 ―

天保六年(一八三五)、播隆は五回目の槍ヶ岳登山を行い、帰路は飛騨国へ向かうために飛騨沢を下りました。これが播隆にとって最後の槍ヶ岳登山となりました。

十合目

善の綱をたどれば

天保十一年(一八四〇)、播隆の弟子や講中の人びとの協力で、藁縄にかわって槍の穂先に鉄鎖がかけられました。播隆は玄向寺(長野県松本市大村)で病に伏せている中、その報告を聞き、長年の念願を果たしたのでした。同年、播隆は中山道太田宿(岐阜県美濃加茂市太田本町)の脇本陣・林家で大往生、行年五十五歳でした。

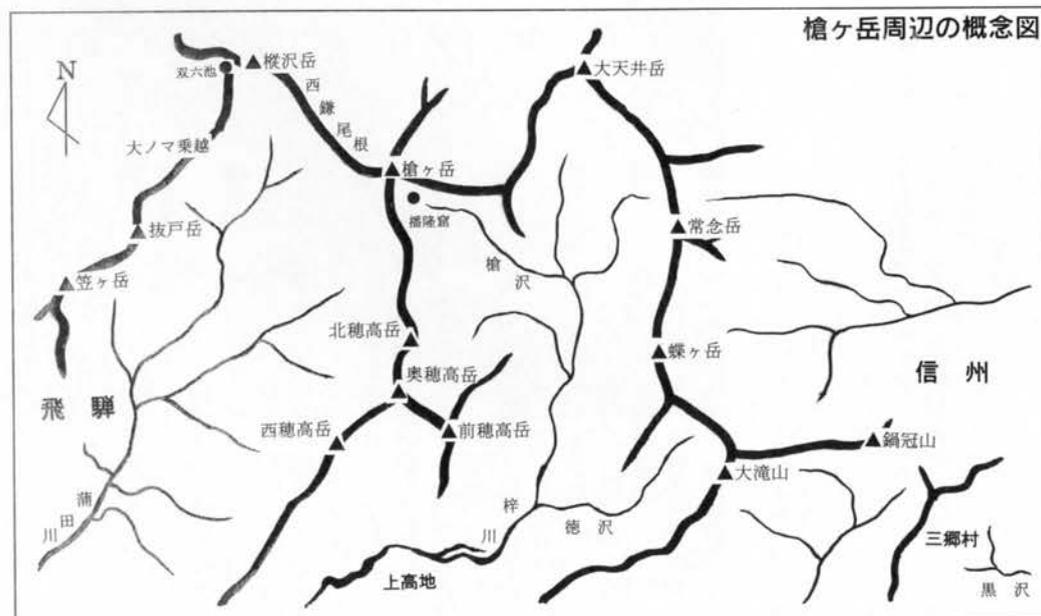
ちよつと一息

第三部

播隆研究アラカルト

播隆に関する調査・研究は、これまで各方面で行なわれてき

ました。その成果は出版物などにまとめられ、私たちが播隆の活動をうかがい知るための貴重な情報となっています。ここでは播隆研究の系譜と、その一端をご紹介します。(以上、展示説明文より)



播隆略年譜

年号	西暦	年齢	事項
天明六	一七八六	一	越中国新川郡河内村(現富山県富山市、旧上新川郡大山町河内)に生まれる
文化元	一八〇四	一九	尾張国の尋盛寺(名古屋市中)の性誉上人に弟子入り 〔行状記〕によると、この年、大和国(現奈良県)阿辺ヶ峰の見仏上人の弟子となる
文政一	一八一四	二九	江戸本所の靈山寺(東京都墨田区)で浄土宗の正式な僧となる
文政三	一八一八	三三	この頃、山城国の一念寺(京都市)の蠟誉上人のもとで修行する
文政四	一八二〇	三六	※飛州新道開削着工
文政六	一八二二	三八	飛騨国の杓子の岩屋(岐阜県高山市上宝町岩井戸)で山籠修行する
文政七	一八二四	三九	六月頃、初めて笠ヶ岳に登る
文政八	一八二五	四〇	七月二十九日、笠ヶ岳への登山道が整備され、二回目の笠ヶ岳登山
文政九	一八二六	四一	八月五日、村人十八人とともに三回目の笠ヶ岳登山、御来迎(ブロッケン現象)を拝す
文政一〇	一八二七	四二	八月二十二日、「迦多賀嶽再興記」を書く
文政一一	一八二八	四三	八月五日、村人ら六十六人とともに四回目の笠ヶ岳登山、御来迎を拝す。登山道に石仏、山頂に阿弥陀仏像を設置する
天保元	一八三〇	四五	※夏までに飛州新道、上高地まで開通
天保二	一八三二	四七	この頃、伊吹山の岩屋や草庵(播隆屋敷)で修行する
天保三	一八三三	四八	八月、信濃国小倉村に中田又重を訪ね、その案内で一回目の槍ヶ岳登山、初登頂する
天保四	一八三四	四九	七月二十日、二回目の槍ヶ岳登山。山頂に仏像を設置して槍ヶ岳開山を成す
天保五	一八三五	五〇	八月一日、穂高岳に六字名号碑を設置する
天保六	一八三六	五一	美濃国に播隆開山の一心寺(岐阜県揖斐郡揖斐川町)が建立される
天保七	一八三七	五二	八月、三回目の槍ヶ岳登山
天保八	一八三九	五三	六月十八日、四回目の槍ヶ岳登山。八月十二日下山。その間、山頂付近に藁縄と木鈎で作った善の綱を設置する
天保九	一八四〇	五四	八月、「三昧発得記」を書く
天保一〇	一八四一	五五	六月二十四日、五回目の槍ヶ岳登山
天保一一	一八四二	五六	十月三日、信濃国の鍋冠山中で小屋掛を凶るが大雪で失敗、足の指二本を凍傷で失う
天保一二	一八四三	五七	※飛州新道全通
天保一三	一八四四	五八	四月、信濃国松本新橋の信徒・大坂屋佐助が「信州鎗嶽畧録起」を施版・配布し、善の綱掛け替え用となる鉄鎖の資金を募る
天保一四	一八四五	五九	鉄鎖で作られた善の綱が天保の飢饉のため松本藩に差し押さえられる
天保一五	一八四六	六〇	下総国の徳願寺(千葉県市川市)で加行し浄土律宗和上となる
天保一六	一八四七	六一	この年、槍ヶ岳への鉄鎖取り付けが許可される
天保一七	一八四八	六二	七月、信濃国の玄向寺(長野県松本市)で病に伏す
天保一八	一八四九	六三	八月頃、信徒らによって槍ヶ岳山頂に鉄鎖でできた善の綱が設置され大願成就する
天保一九	一八五〇	六四	十月二十一日、中山道太田宿(岐阜県美濃加茂市)で大往生する。行年五十五歳

*注 年齢は数え年。

(黒野こうき氏監修・市立大町山岳博物館作成)

第12代将軍・徳川家慶(1837~1853年)

第11代将軍・徳川家斉(1787~1837年)

老中・水野忠邦(1841~43年・天保の改革)

老中・松平定信(1787~93年・寛政の改革)

企画展のご案内

市立大町山岳博物館 企画展

播隆・槍ヶ岳への道程 ―善の綱をたどれば―

主催 市立大町山岳博物館

監修・協力

ネットワーク播隆代表・黒野こうき氏

後援 信濃毎日新聞社 朝日新聞松本支局 中日新聞社 読売新聞松本支局 毎日新聞松本支局 産経新聞社長野支局 大系タイムス株式会社 民友信州 市民タイムス FM長野 SBC信越放送 NBS長野放送 (株)テレビ信州 長野朝日放送(株) アルブスケープレビジョン(株) 大町市有線放送 電話農協 (順不同、敬称略)

会期 六月四日(土)~八月二日(日)

(六月六・一三・二〇・二七日の月曜日は休館)

開館時間 午前九時~午後五時

(入館は午後四時三〇分まで)

会場 市立大町山岳博物館

特別展示室・ホール

観覧料 大人四〇〇円 高校生三〇〇円

小・中学生二〇〇円

※常設展と共通。三〇名様以上の団体は各五〇円割引。そのほかの各種割引については窓口でお問い合わせください。

お知らせ

本展にあわせ、展示内容を詳しく紹介した展示解説書(A四判・三十六頁)を発行します。詳しくは当博物館までお問い合わせください。

山と博物館 第50巻 第5号

発行 市立大町山岳博物館

〒388-0002 長野県大町市大字大町八〇五六一

TEL 026-261-1131

FAX 026-261-1133

E-mail: sanpakut@city.omachi.nagano.jp

URL: http://www.city.omachi.nagano.jp/sanpakut/

印刷 奥村印刷

定価 年額 一、五〇〇円(送料含む)(切手不可)

郵便振替口座番号 〇〇五〇四一七一三三九三